

綿業会館本館

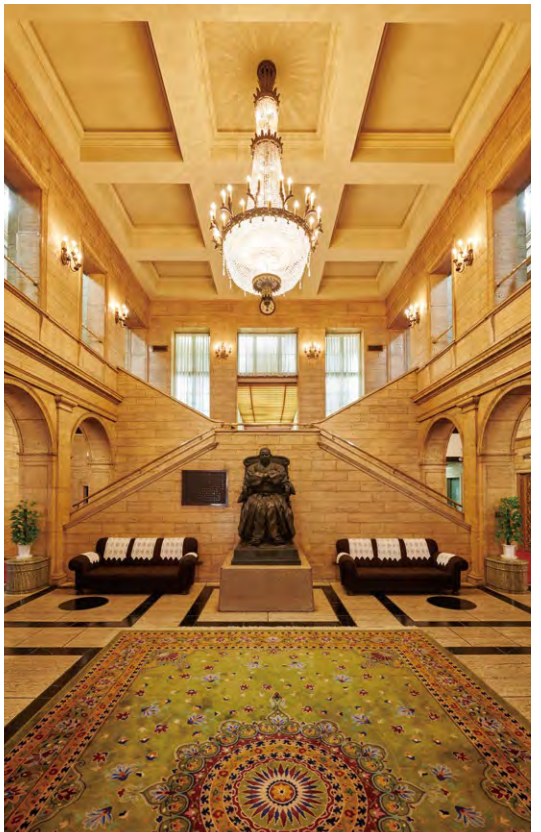
Mengyo Kaikan Hall

「大大阪」時代の綿業界の 繁栄を物語る倶楽部建築

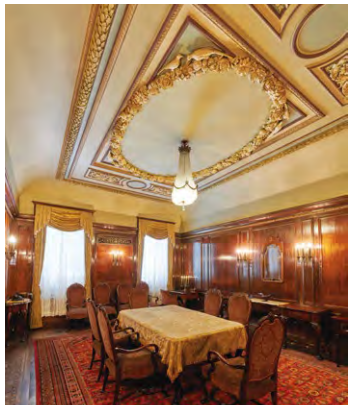
大阪市の綿業会館本館は、昭和3(1928)年に創設された日本綿業倶楽部の社交場で、昭和6年に竣工。渡邊 節設計の近代建築の傑作として、大阪が繊維業の発展で活況を呈していた「大大阪」時代から今日に至るまで受け継がれ、活用されている。重要文化財。



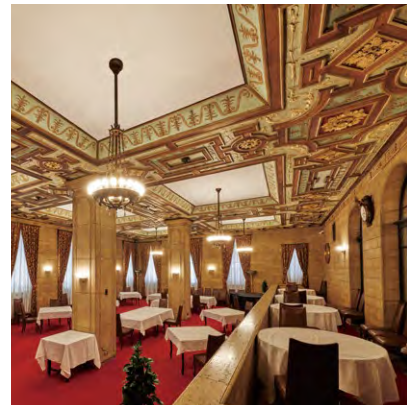
豪華な装飾の談話室。綿業界の人々の多くが紡績業発祥の地、イギリスを訪れていたことになみイギリスのジャコビアン様式とした。



玄関ホール。トラバーチン(イタリア産大理石)の大階段やアーチは、左右対称でバランスの取れた美しさが特徴。床に絨通(だんつう)を敷く。



皇室専用だった貴賓室。直線に曲線を組み合わせた装飾。天井に鳥や花の漆喰細工がある。



会員食堂の天井はミューラル・デコレーション。当時、アメリカのホテルや邸宅で流行していた。



①会議室。装飾はシンプル。直線的で端正、荘重さを特徴とする。②会議室の別名は鏡の間。隣室との間の扉に鏡を張り、錯覚による奥行き、広がり演出。③床の大理石にアンモナイトが見られる。

大正期から昭和初期は繊維産業の隆盛期^{※1}で、繊維産業が集まる大阪は大正14(1925)年に面積・人口も日本一になり、「大大阪」と呼ばれる繁栄を誇っていた。綿業会館本館は東洋紡績・岡 常夫氏の遺言による寄付100万円と繊維業界からの寄付50万円の計150万円^{※2}で建設され、同時期に再建された大阪城天守閣の建築費の約3倍であった。設計は様式建築の名手で、関西を中心に数々の近代建築を残した渡邊 節。その弟子・村野藤吾は渡邊節建築事務所を退所していたが、チーフドラフトマン(製図士)として参加した。

外観はイタリア・ルネサンス様式で比較的シンプルなデザイン。一方、玄関ホールは同じ様式ながら、高価な大理石を張り詰めて重厚な空間とし、端正な大階段やアーチを配している。貴賓室は18世紀初頭のイギリスに見られるクイーン・アン様式、会議室はナポレオン帝政下のフランスで流行ったアンピール様式と、館内には多様な建築様式を採用した。特筆すべきは豪華でありながら落ち着いた佇まいの談話室で、イギリス・ルネサンス初期のジャコビアン様式でしつらえた。設計後に渡邊が吹き抜けへの変更を希望したといい、2本の柱が高さを

感じさせる。また、約1,000枚の泰山タイルをちりばめたタペストリー風の装飾壁も圧巻。各空間のこうした多様性は、今後ここに集う人々の様々な好みに添おうとする渡邊の工夫であった。渡邊はまた、換気を考慮した間接暖房や地下水による冷気送風システムを全館に導入、窓ガラスにフランス産ワイヤ入り耐火ガラスを用いるなど、設備面でも先見性を発揮した。開館直後のリットン調査団来館をはじめ、昭和40年代まで多くの国際会議も行われ、現在も多数の会員を擁して活用され続けていることは名倶楽部建築の何よりの証であろう。

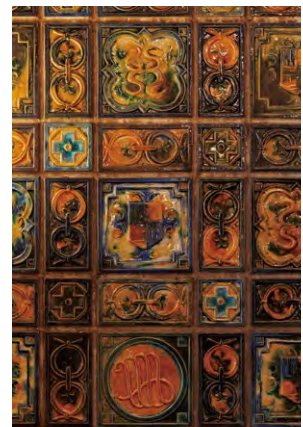
※1 昭和8年、日本の繊維製品輸出額は世界一となった。 ※2 現在の貨幣価値で約75億円。



綿業会館では綿業界の人々が情報交換はもとより、囲碁や屋上でのゴルフの練習、食事を楽しみながら交流した。手すり棒を思わせる装飾やアーチを付け、階ごとに意匠を変えた窓(右)。



耐火ガラスが第二次世界大戦の戦火を防ぎ、建物は焼失を免れた。周辺は焼け野原になった。



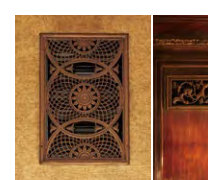
談話室のタペストリー風の装飾壁。唐三彩調のタイルを渡邊が自ら配置した。



地下グリのらせん階段は村野藤吾デザイン。藤をあしらってある。



平成初頭まで使用された1階のポスト。上階からの郵便物が集まった。



暖房・冷気の送風口。空調ダクトは将来の冷房への転用も視野に入れて計画された。

用語説明

【ジャコビアン様式】イギリス・ルネサンス初期、ジェームズ1世の治世(1603~25年)に行われた建築・工芸の様式。
【様式建築】西洋の建築様式を駆使した建築。
【村野藤吾】1929年に渡邊節建築事務所を退所後、独立。近代的な建築技法と伝統的素材を独自に融合させた作品を残した。
【泰山タイル】京焼の池田泰山が作った美術タイル(陶磁器の風合いに美術的な表現を加えている)。
【リットン調査団】満州事変の調査のために国際連盟が派遣したリットンを団長とする委員会。
協力:一般社団法人 日本綿業倶楽部
〒541-0051 大阪市中央区備後町2丁目5番8号

